五千石遺跡（ごせんごく） 縄文／弥生／古墳

〔平成18年当時〕五千石遺跡 遠景（東から）

微高地位置図（東から）

弥生時代 周溝をもつ建物跡

縄文時代の遺物

古墳時代 集落跡（北西から）

所在地：五千石、長岡市敦ヶ曽根（つるがそね）
（信濃川大河津分水路左岸河川敷）

五千石遺跡出土の土師器・須恵器

どんな遺跡？

五千石遺跡は、大河津分水路左岸の河川敷に広がり、燕市と長岡市の境界付近の旧自然堤防上に位置します。分水路可動堰改築事業に伴い、平成18～20年度にかけて燕市教育委員会と長岡市教育委員会が本発掘調査を実施しました。

調査の結果、遺跡は北西－南東方向の２筋の平行する微高地上に立地し、縄文時代晩期、弥生時代中期～後期、古墳時代前期・後期と断続的に営まれた集落であり、古墳時代を主体とする遺跡であることが分かりました。

弥生時代では、炭を溜めた炉を中心に柱穴を円形に配し、その周りを不整形の溝をめぐらせた建物が検出されました。これは、中期の北陸でよくみられる平地建物です。

古墳時代の遺構は、前期の掘立柱建物（穴を掘り柱を埋めて屋根や床を支える形式）や方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）（弥生時代前期～古墳時代前期に主に近畿地方でみられる四方に溝が掘られた墓形式）が確認できました。

遺物では、前期の畿内系と思われる高杯や県内でまだ生産されていない時期の須恵器などの搬入品がみられます。また、勾玉や臼玉、石製模造品などの祭祀関連遺物が出土したことから集落内で何らかの祭祀を行っていたことがうかがえます。

五千石遺跡周辺には、浦田遺跡や石港遺跡など古墳時代の遺跡が存在します。北陸特有の住居形式や畿内系の土師器の存在は、日本海からの玄関口である石港遺跡を介した内水面を利用した交流が想像できます。

稲葉遺跡　古代～中世

〔令和2年撮影〕稲葉遺跡遠景（東から）

畑の畝跡（右が南）

土師器・須恵器　出土状況

畑の畝跡（北西から）

須恵器壺　出土状況

所在地：米納津字稲葉

稲葉遺跡出土の土師器・須恵器

どんな遺跡？

稲葉遺跡は、米納津集落の東端にある頓了寺の北西部に位置します。昭和35～37年にかけて吉田中学校歴史部による分布調査で存在が明らかになり、令和２年度に県営ほ場整備事業（米納津・佐渡山地区）に伴い本発掘調査を実施しました。

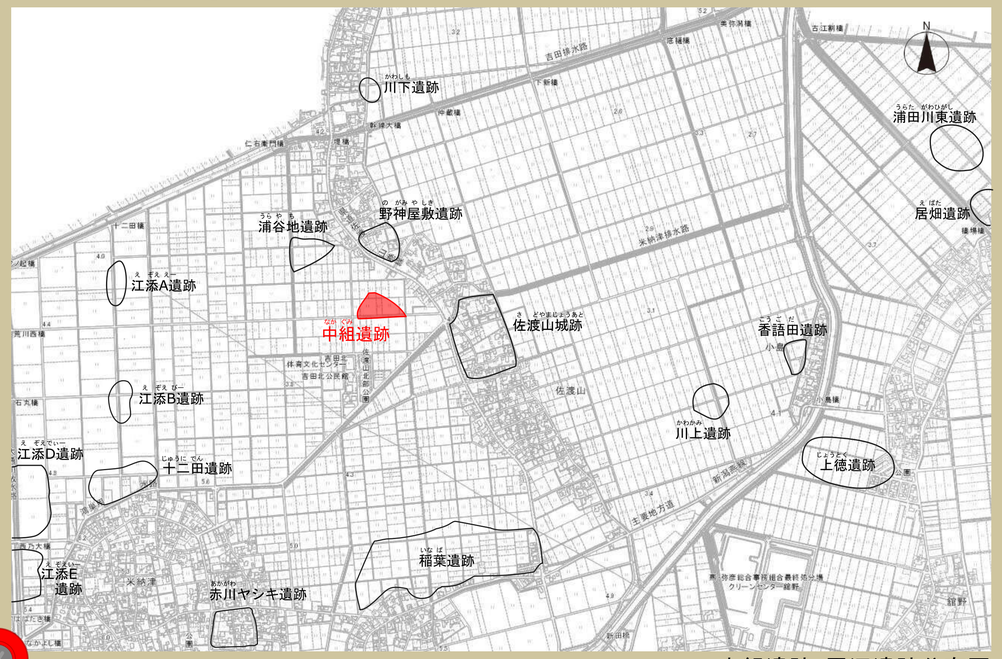
調査の結果、平安時代を主体とした集落であることが分かりました。遺構は、区画のための溝や竪穴建物と思われる土坑が1基確認されましたが、その大部分は畑の畝跡です。

遺跡からは土師器・須恵器が多く出土しました。特に須恵器は、新津丘陵と阿賀野川以北から多く供給され、９世紀中葉以降は佐渡小泊産がほとんどを占めるようになります。また、鉄滓（鉄を製錬する時に出る不純物）や羽口（鉄を溶かす炉内の温度を調整するための送風管）が出土していることから、付近で製錬鍛冶を行っていたと考えられます。さらに、須恵製と石製の「権状錘」が２点発見されました。「権状錘」とは棹秤のオモリであり、国は律令制下において税の徴収や米・酒の度量衡を統一することで、中央集権化を図りました。権状錘は度量衡を管理する役人がもつものであり、この遺跡にはそれに値する人物がいたことがうかがえます。

稲葉遺跡の集落と畑地の組合せは一般的集落のあり方です。しかし、鍛冶関連遺物や権状錘の存在に加え、周辺の三角田遺跡からも権状錘が出土しており、江添Ｅ遺跡では石製丸鞆、中組遺跡からは「池津」と書かれた墨書土器が出土しています。

ここ米納津一帯は、内水面交通を利用した交易が盛んであったことを示しており、公的施設や役人の存在が想像できます。

中組遺跡　平安



中組遺跡　周辺遺跡分布図

〔平成6年当時〕中組遺跡　近景

池津

墨書土器

5号溝遺構

緑釉陶器

所在地：佐渡山字浦谷地

新潟県立歴史博物館常設展示図録より

どんな遺跡？

団体営農道整備事業に伴う発掘調査を平成６年度に実施しました。

調査の結果、土坑・ピット・溝状遺構を検出し、平安時代に位置づけられる多量の遺物が出土しました。出土遺物の中には墨書土器や京都産とみられる緑釉陶器の椀・皿といった一般集落からはあまり出土しない土器が含まれています。

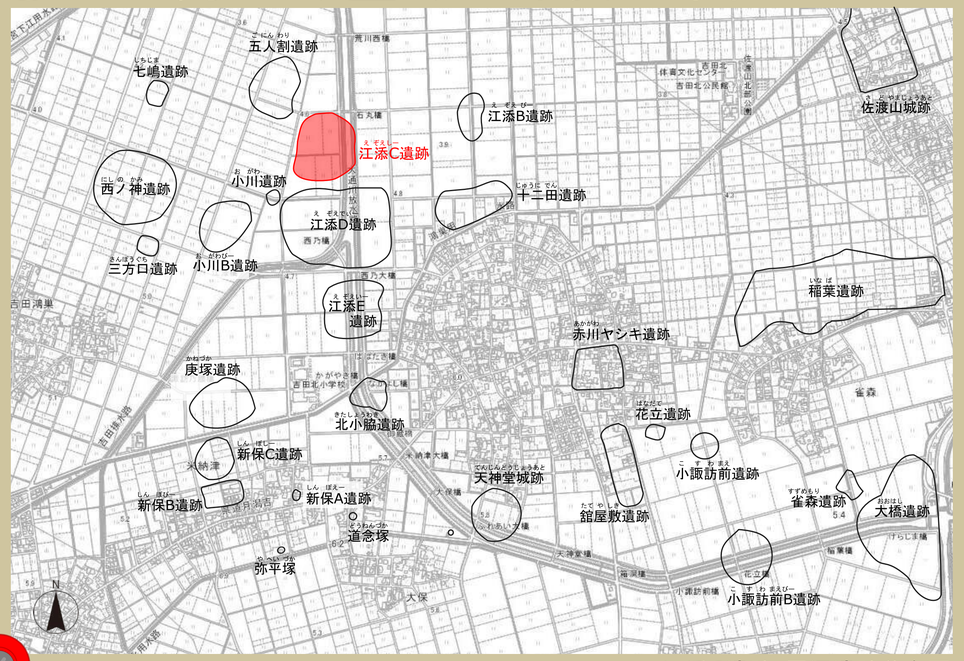
墨書土器は判読できないものもありますが、「池津」と読めるものが９点出土しています。これは施設名と考えられ「津」は港を意味することから、中組遺跡は河川交通の港として機能していた可能性があります。「池」の字形には２種類あり、中国の木簡に見られる字形があるため、文字に習熟した人物がこの地にいたことが分かります。緑釉陶器は、京都から北陸経由で信濃川・阿賀野川の河口付近に至り、西川など中小河川を通じて遺跡まで運ばれたと考えられます。

このような流通体系と深い関わりを持つ拠点のような遺跡だったため、緑釉陶器が遠く離れた地からもたらされたのでしょう。

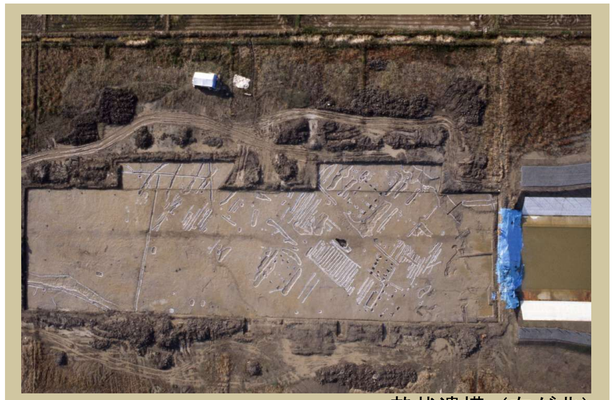
令和元年度、ほ場整備事業に伴う用水路工事立会いにおいて遺構・遺物が確認され、遺跡範囲がさらに広がることが判明しました。

中組遺跡出土「池津」墨書土器の字形

江添C遺跡（えぞえしー） 平安～中世

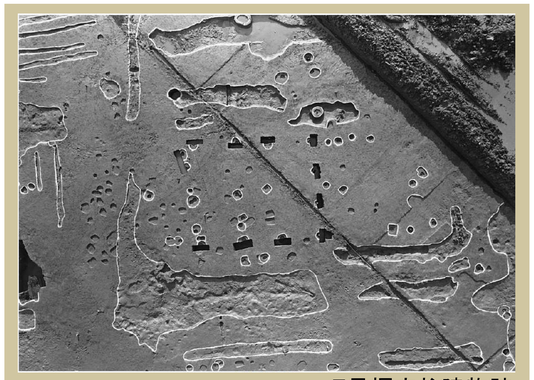


江添C遺跡 周辺遺跡分布図



畝状遺構（右が北）

墨書土器「大神」



7号掘立柱建物跡

1号井戸跡

所在地：米納津字江添（よのうづあざえぞえ）

江添C遺 墨書土器

どんな遺跡？

大通川放水路事業に伴う発掘調査を平成11年度に、県営ほ場整備事業（米納津中央地区）に伴う調査を平成12年度に実施しました。遺跡の南側には江添D遺跡・江添E遺跡・北小脇（きたしょうわき）遺跡と古代の遺跡が連続して存在しており、旧自然堤防など微高地の上に形成された遺跡群と考えられます。

調査では、平安時代の掘立柱建物・土坑・溝状遺構・多くの畝状遺構などを検出しました。建物の近くに井戸や畑があり、平安時代の集落の様子を垣間見ることができます。また、300点を超える墨書土器・漆書（うるしがき）土器が出土しました。最も多いのは「品」という字で他にも「大」、「田」、「浦」、「他田（おさだ）」、「大神（おおみわ）」、「穴太（あなほ）」、「家成（いえなり）」、「船長（ふながし）」などを確認しました。「他田」や「大神」、「穴太」、「家成」、「船長」は氏族名（ぞくめい）や人名と考えられており、古代のこの地域にどんな人々が暮らしていたのかを示す資料と言えます。

掘立柱建物や多数の畝状遺構が検出されたため、農業生産を主体とした集落とみられますが、多量の墨書土器の存在から一般的な農耕集落ではなく、役人が関わる生産や流通の拠点のような集落だった可能性があります。

左の遺跡分布図のとおり、米納津周辺には古代～中世までの遺跡が多く存在し、中小河川が形成した微高地を利用して人々が住んでいたことが分かります。そして今もなお、その微高地上に佐渡山（さどやま）や雀森（すずめもり）などの集落が形成されており、この地域の地形の特徴がよく表れています。

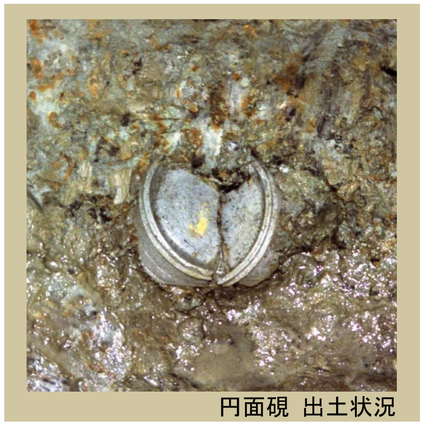
北小脇遺跡（きたしょうわき） 古代～中世

北小脇遺跡（右が南西）

噴砂の跡

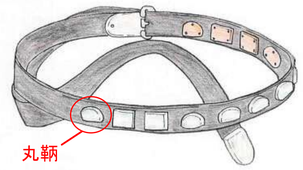
丸鞆 出土状況

土師器椀 出土状況



円面硯 出土状況

所在地：米納津大保（よのうづだいぼ）



袴帯復元図

どんな遺跡？

吉田北小学校の南東側に隣接して位置します。大通川（おおどおりがわ）放水路事業に伴う発掘調査を平成12年度に、県営ほ場整備事業（米納津中央地区）に伴う調査を平成13・14年度に実施しました。

調査の結果、古代と中世の遺跡であることが分かりました。

古代では掘立柱建物・井戸・土坑・ピット・炉跡・畝状遺構などを検出したほか、地震による地割れや噴砂（ふんさ）（液状化で地割れから砂と水が混ざったものが噴き出す現象）の跡を確認しました。

出土遺物の中では、墨書土器や円面硯（えんめんけん）、石製丸鞆（せきせいまるとも）などが注目されます。丸鞆は古代の役人が身に着けたベルトの飾りです。これを身に着けた役人が硯で墨をすり、土器に文字を記したのかもしれません。ただ、墨書土器は文字が判読できないものが多く、北小脇遺跡から北へ約750mの位置に所在する江添C遺跡から出土したものと比べても筆跡がしっかりしていないことから、文字をよく理解せず書いていた可能性があります。

また、渡部の天王（てんのう）遺跡からも円面硯が出土しており、この硯は古代頸城郡関係の役所だった可能性のある栗原（くりはら）遺跡（妙高市）のものと似ています。

天王遺跡の円面硯

中世では掘立柱建物、道路状遺構、炉跡、井戸などを確認しました。中でも、500kgを超える鉄滓や羽口の出土から、この地で鉄塊から不純物を取り出し加工しやすい状態にする大鍛冶作業が行われていたことが分かります。